宮城学院女子大学発達科学研究
2025. 25. 25-36

東日本大震災の教訓を自分事として学ぶ防災教育の実践
～地域の語り部や震災遺構の活用を通して～

今　野　孝　一[1]

東日本大震災から早くも14年が経過した。30年前に発生した阪神淡路大震災や、20年前に発生したインド洋大津波（スマトラ島沖地震）では、時間の経過とともに、震災の記憶は薄れ、それらの教訓は風化しつつある。日本では、2024年の元日に能登半島地震が発生し、大きな被害を出した。将来、南海トラフ地震や首都直下地震、日本海溝・千島海溝巨大地震の発生が予測されている。次に発生する震災で一人でも多くの命を救うことが、防災教育の大きな役割である。震災を経験したことがない子どもたちに、これまでの震災の教訓を語り継ぎ、自分の命を守る力や知恵を身に付けさせることが重要である。防災教育においては、災害の知識や被害を伝えるだけでなく、防災を「自分事」として実感を持って学習するように、指導内容や方法について工夫が求められている。そこで、防災教育における地域の語り部や震災遺構の活用等を通して、東日本大震災で得られた学校防災上の知見や教訓をどのように学ばせるべきなのか、教員養成大学と小学校での防災教育の実践を通して考察する。

Keywords：防災教育、学校安全、東日本大震災、教員養成、自分事、震災遺構、語り部

1.　はじめに

震災関連死を含め22,222名、教育現場だけでも、幼児児童生徒と教職員を合わせて733名の学校関係者が亡くなった東日本大震災から14年が経過した。人々の記憶は、時間の経過とともに薄れていく。小中学生のほとんどが東日本大震災後に生まれた子どもたちであり、高校生や大学生にとってもおぼろげな記憶しかないのが現状である。今年度採用された新任教員の多くは、当時小学2年生であり、震災時に学校で子どもたちの命を守った経験がある教員も少なくなりつつある。管理職等の学校全体の意思決定を行った教員の多くは退職した。学校教育において震災の教訓を風化させず、伝え続けることは難しい。

東日本大震災では、沿岸部のほとんどの学校が、巨大地震の後に押し寄せた想定外の大津波に対し、教員や地域の方々の臨機応変な判断や対応により、高台や校舎の屋上などに避難し無事であった。「釜石の奇跡」などの成功例が紹介されたものの[1]、それぞれの学校がどのように教員の臨機応変な判断や対応で、子どもたちや地域の方々の命を守り、救ったのかということについては、詳細に解明されているとはいえない。

また、江戸時代から戦前までに発生した大震災について、防災教育という観点から語り継がれてきたものは少ない。その中で、1854年安政南海地震・津波で、人々の命を救った和歌山県広村（現在の広川町）濱口梧陵の実話をもとにした「稲むらの火」の物語は、現在でも伝承されている。戦前の尋常教科書[2]や戦後の社会科等の教科書に掲載されており、この話が由来となり、2015年に国連で「世界津波の日（11月5日）」として制定された。昨年、広小学校を訪問し避難訓練を視察した際にも、170年前からの「稲むらの火祭り」（10月）や「広八幡宮までの避難訓練」など（11月）を継続していることには、大変感銘を受けた。町や地域が一体となって震災の教訓を語り継ぎ、継続している貴重な例であり、東日本大震災の被災地でも見習うべきである。

また、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災は、今年でちょうど30年目の節目の年を迎えた。東日本大震災の発災時には、神戸の方々が

1. 宮城学院女子大学教育学部

真っ先に東北の被災地を訪れ、復興の手助けをしていただいたのを忘れない。神戸の先生方は震災の記憶の風化とも向き合いながら、震災の教訓や防災教育の充実に今も取様々な工夫を続けている。

東日本大震災でも、和歌山県広川町や神戸市のように、震災の教訓をしっかりと後世に語り継ぎ、防災教育を継続することが求められる。

防災教育において、震災を知らない子どもたちに、災害を「自分事」として捉えさせ、「自分の命を自ら守る」具体的な行動に結び付けさせることは難しい。そこで、どのような内容や活動を行えば、災害を「自分事」として学ぶことができるのかを検討した。

その一つの手法として、東日本大震災以降に保存されることになった「震災遺構」を活用するとともに、震災の様子を直接伝えてくれる「地域の語り部」を防災教育に積極的に活かしていくことが有効であるのではないかと考え、防災教育プログラムに取り入れることとした。

後世に震災の被害等を伝えるために保存・公開されている「震災遺構」は、被災地の大切な教育資源であり、宝でもある。「震災遺構」のうち、特に学校の震災遺構（以下「学校震災遺構」）を防災教育に活用すべきである。宮城県内には、東日本大震災で津波被災した小学校4校、高等学校1校の計5校が、学校震災遺構として保存され、一般公開されている。

まず、石巻市震災遺構　門脇小学校は、校舎が津波と津波火災で全焼したが、平時から日和山への避難訓練が実施されており、意思決定に時間を要することなく、当時の鈴木洋子校長を中心にスムーズに避難が行われた。

震災遺構　仙台市立荒浜小学校は、津波が校舎2階まで押し寄せたが、児童や教職員、住民ら320人が3階以上に避難して一夜を過ごした。当時の川村孝男校長は、以前から津波を想定し避難物資を4階に上げたり、校庭でなく上階への津波避難訓練を行ったりしていた。現在、仙台市内の全ての小学校が毎年見学に訪れ、防災学習に活用している。

山元町震災遺構　中浜小学校は、高台にある中学校まで20分以上かかることから、当時の井上剛校長が屋上への避難を決断し、2ｍほどかさ上げされた校舎の屋上の屋根裏で児童と教職員、保護者ら90人の命を守り抜いた。

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（気仙沼向洋高等学校）は、校舎の4階まで津波大きな被害を受けたが、校内にいた生徒や教職員らは全員無事だった。破壊された校舎や車、がれきを当時の状態で公開している。

石巻市震災遺構　大川小学校は、津波避難の判断が遅れ、川を遡上した津波によって、児童70名が死亡、4名が行方不明、教職員も10名が死亡し戦後最大の学校災害事故となった。大川伝承の会の佐藤敏郎氏等が中心となり、語り部として教員や教師を目指す大学生などに大川小学校の被害や教訓を語り継ぐ大切な「未来を拓く」場所となっている。

「地域の語り部」は、各県ごとにリストアップされ、まとめられている。一般的な震災を学ぶ震災ツーリズムではなく、教員研修や学校の授業で活用しようとすると限られてくる。震災当時、教員や校長だった方々や、児童生徒、保護者だった方など学校関係者の語り部から、被害状況や改善点、思いを伝えてもらうことが有効であり、語り部の選定が重要な要素となる。震災遺構では、当時の先生等が語り部として講話しているので活用を考えたい[3]。

今回は、大学における教員養成の防災教育プログラムの授業実践で、学校震災遺構研修や語り部による特別講義により学生の意識がどのように変化したのかを探り、プログラムを改善させていく。

また、小学校での防災教育の授業実践を通して、震災を知らない子どもたちに「自分事」として「自分の命を守り抜く行動」を考えさせるアクティブラーニングの手法を取り入れた防災教育を開発・実践していきたい。

2.　目的と方法

本研究では、地域の語り部や学校震災遺構等の

活用を通して、東日本大震災で得られた学校防災上の知見や教訓をどのように学ばせるべきなのか、教員養成大学と小学校での防災教育プログラムの実践を通して、その在り方を考察・整理することを目的とする。

3.　教員養成段階での防災教育の実践

(1) 教員養成における防災教育の必要性

教員養成での安全教育や防災教育の必要性については、国の教職課程コアカリキュラムに学校安全の項目が追加された。「第3次学校安全の推進に関する計画」でも、教員養成大学等に学生が防災を含めた学校安全に関して学修する機会や内容を充実するように求めている[4]。しかし、教員養成で「何を、どのように、学ぶべきか」は、定まってはいない。

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城・岩手・福島の被災3県の教員養成課程をもつ国立大学では、防災教育や復興教育に特化した授業科目を設定し、学校安全や防災教育について学修させている[5]が、他の各大学の状況をみると、「履修科目の制限」や「体制などの課題」も見られ十分だとはいえない[6]。

さらに、教員養成の教育現場においては、近年、ICT機器の活用やAI、プログラミング教育、いじめや不登校問題への対応、小学校英語の導入など、学校現場が対応すべき教育課題や学習内容が増え続けており、それに伴い大学で防災教育に多くの時間を割くのは難しい状況にあることは否めない。

しかし、南海トラフ地震や首都直下地震、千島・日本海溝地震等の発生が想定されている日本では、防災教育を指導することが必要であり、学校安全や学校防災に関する資質・能力を身に付けた教員を養成するのは、教員養成大学の責務でもある。

そこで、防災教育論のカリキュラムを以下の6つの観点で検討して実践し、教員を目指す学生の資質・能力の変容等について調査した。

(2) 防災教育論の内容の検討

防災に関する知識や教訓を伝えるとともに、子どもたちへの実践的指導に結び付けられるよう、以下の6つの観点で教員養成における防災教育論の内容を検討し、シラバスを作成した。

① 東日本大震災等の学校現場での教訓を具体的に捉える。
② 担任として防災教育の教材等を使って、子どもたちにどのように指導するのかを考える。
③ 避難訓練の重要性や在り方を考え、子どもたちが真剣に取り組むように指導する。
④ 震災遺構等を活用するとともに、語り部として震災を経験した教員等から経験や教訓を聞き、自分だったら教員としてどう判断・行動するのかを考える。
⑤ 防災教育においても、ICT機器やオンライン授業などを積極的に活用する。
⑥ 地域や保護者、外部機関との連携の重要性について学ぶ。

○　防災教育論　シラバス

〈授業概要〉

災害リスクの想定に関する基礎的知識をもとに、想定外の事態に対応できる能力を多様なアプローチで育成する。学校防災に関わる国内外の議論や取組、自然環境の本質や災害発生のメカニズム、危機的状況への対応など、学校防災教育の実践的指導力の基礎を身に付け、アクティブラーニングの視点で意見交換を行う。被災地の震災遺構研修や教員等による語り部の講義を行う。

〈防災教育論　到達目標〉

災害や防災教育についての基礎知識を得て、教師として子どもたちの命を守る防災教育の在り方について考える。具体的には以下の4点を目標とする。

(1) 災害への意識を高め、対応力を持つ。
(2) 東日本大震災や水害も含め、身近な災害に向き合う。
(3) 災害時に子どもたちの命をどのように守るのかを議論する。
(4) 東日本大震災等の教訓をどのように伝え続けるのか、防災教育の実際などを理解する。

(3) 防災教育論の実践

本学教育学部　教育学科　児童教育専攻の2年生、32名を対象に、以下の内容で15回の授業を行った。必修ではなく、選択授業であったが、約8割の学生が受講している。

なお、学校震災遺構などの被災地研修を含むのことから、授業日を土曜日に設定した。

〈授業内容〉

第1時	ガイダンス 東日本大震災の学校での被害状況と防災教育の必要性
第2時	防災教育の意義と考え方 阪神淡路大震災、東日本大震災の教訓を踏まえた学校安全計画と危機管理マニュアルのポイント（自分で判断・行動できる力を育む防災教育はどうあればよいか話し合う。）
第3〜4時	地域の学校震災遺構から学ぶ 震災遺構仙台市立荒浜小学校を見学し、当時の校長先生から話を聞く。（震災時教員として子どもたちや地域の方々の命をどのように守ったのかを知る。）
第5時	学校・家庭・地域が連携した実践的な防災訓練の在り方（登下校時を含め、子どもたちに真剣に取り組ませるためにはどうすればいいのかを考える。） ＊参考　和歌山県広川町立広小学校 （「稲むらの火」の学校） 釜石市立釜石東中学校
第6時	避難所開設と保護者への引き渡し、子どもたちの安否確認（震災発生時の地域と連携した避難所開設、備蓄や電源確保、SOSの伝え方、津波発生時の引き渡しの在り方と安否確認についてシュミレーションする。）
第7時	災害によるPTSD、トラウマと心のケア 震災後に子どもたちの心のケアに取り組んできた臨床心理士等から、対応方法について学ぶ。（災害発生後に子どもたちの傷ついた心にどのように寄り添っていくのかを考える。）
第8時	岩手県釜石小学校の防災教育 「津波てんでんこ」と釜石の奇跡はどのようにして生まれたのかを当時の校長から聞く。（自分事として命を守れる子どもを育てるために、どうすればいいのかを考える。）
第9〜11時	防災教育の学習計画と実践 子どもたちが「自分事」として防災を捉え学んでいく防災教育の計画を作成し、実際に模擬授業を行う。 ＊防災安全マップ発表会 防災クロスロードゲーム マップマヌーバー[7] 災害（津波）の歴史と先人の思い等
第12〜13時	大川小学校津波災害事故から学ぶ 震災遺構大川小学校を視察し、語り部の先生から話を聞く。（自分が教員としてどうすれば子どもたちの命を守れるのかを考える）
第14時	生きぬくための知恵 震災時の持ち物や避難袋と避難時のサバイバル食の作成を行う。
第15時	まとめ 今後の実践のために

(4) 学生の防災意識の変化

防災教育論では、宮城県沿岸部の被災地にある二つの学校震災遺構を訪れ、被災地研修を実施した。

まず、5月25日には、仙台市若林区にある震災遺構仙台市立荒浜小学校で、当時校長だった川村孝男先生に案内していただき、被害の状況や教員の避難の判断、次の日にヘリコプターで救助された様子、その後の子どもたちの様子や成長等について、特別講義をしていただいた。

次に、7月13日に石巻市震災遺構大川小学校では、小さな命を語る会代表で当時女川中学校で勤務していた佐藤敏郎氏に、津波で全壊した大川小学校を案内してもらい、裏山まで登れば助かった命をなぜ助けられなかったのか、なぜ北上大橋の三角地帯に避難しようとして津波に流されたのか等について、娘さんを亡くされた思いを込めながら、教員とご遺族の両方の立場で特別講義していただき、涙を流す学生も多く見られた。

また、6月22日には、「釜石の奇跡」で知られる岩手県釜石市立釜石小学校の当時校長だった加藤孔子先生をお招きし、釜石の子どもたちは防災教育や本気の避難訓練のお陰で命が助かったことについて、大学で特別講義をしていただいた。防災マップづくりや下校時の避難訓練、「津波てんでんこ」に象徴される自分の命を守る事の大切さ、家族や地域の信頼関係等について、教員目線から語ってもらった。

2回の学校震災遺構研修と3回の教員経験者の語り部による特別講義後に書いた学生のレポートの中の防災に関わるキーワードをKH Coderとエクセルを使って抽出し、出現数の変化から、学生が防災教育論を受講し、どのように意識の変化があったのかを推察した。

今回の防災教育論で、学生に最も印象に残った学習内容は、学校震災遺構の大川小学校や荒浜小学校の見学と語り部の先生方からの講話を受けたことであった。特に、大川小学校で佐藤敏郎先生からの講話が最も印象深かったことが分かる。

そして、学生は自分たちがこれまで受けてきた

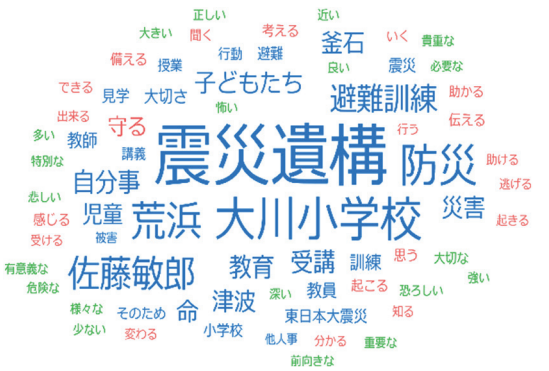
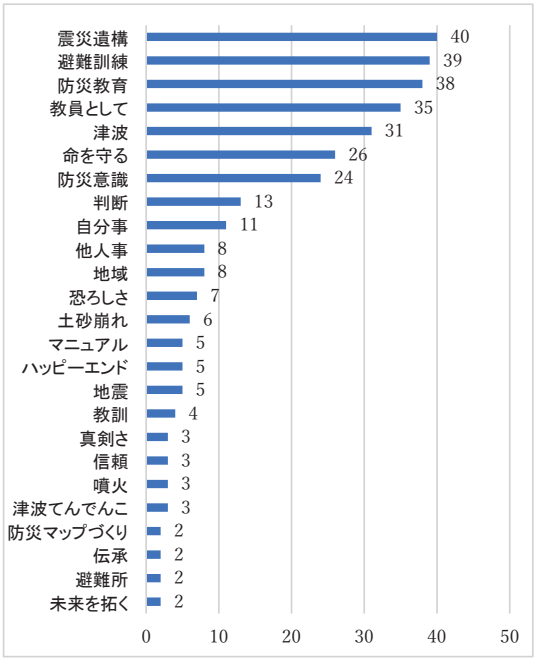


図1　抽出語による関連図（大川小学校視察後）

避難訓練の問題点に気付き、震災発生時に生かされる釜石小学校のような、より実践的な避難訓練や地域と連携したオリジナルの防災教育の必要性を感じていた。

また、子どもたちが学校いるときだけではなく、家や地域にいるときにでも自分の命が守れるよう、その地域に合った実践的な取組についても興味を持っていたことが分かる。

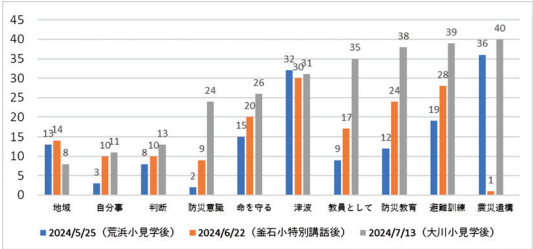
また、キーワードの出現数の変化を見ると、特に変化が大きかったのは、「防災意識」である。それまで漠然としていた防災に対する考え方が、被災地の震災遺構で直接研修したり、震災当時教員だった語り部からリアルな話を聞いたことが、学生の防災意識の変化につながったと推察できる。



グラフ1　キーワード出現数（大川小学校視察後）

次は、「教員として」の項目の増加が見られた。教員らが、子どもたちの命を守るため努力していることを知り、自分が教員になったときに、「教員として」どのように判断し、行動していったらよいのかを具体的にイメージしていた学生が多かった。防災教育を学ぶことは、教師育成という視点から、教師としての心構えや覚悟といった、重要な部分の育成につながっていると考えられる。

もう一つは、「防災教育」と「避難訓練」である。「命を守る防災教育」とは、災害に対する怖さを伝えたり、災害に関する知識を教えることに終始するのではなく、子どもたちに実践的な防災の知恵を授け、「自助のチカラ」（自分の命は自分で守る）を身に付けさせるものであるという感想を述べている学生が多かった。



グラフ2　キーワード出現数の変化（上位10項目）

さらに、自分たちが経験してきた、マンネリ化して緊張感がなく、予定調和的な避難訓練の問題について、学生は気が付いていた。子どもたちが本気で取り組み、災害発生時の本番に役立つような避難訓練の工夫や改善の必要性を捉えていた。

防災教育論を通して、防災教育は教員養成において、「子どもの命を守る」という重要なファクターに気付かせる重要な授業であること、その際には、座学だけでなく、学校震災遺構の視察や教員経験者の語り部の協力を得ることが、より効果

を上げるということがいえることが明らかになった。

以下、学生の感想から抜粋したものを掲載する。

〈学生の感想から（抜粋）〉

○この授業の講義や震災遺構の小学校を見学して話を聞き、防災を自分事として捉え、備えていくことが必要であると思いました。

○防災教育論を受講して、今まではどこか他人事で震災の外枠だけを見ているような感じでしたが、今回実際に話を聞いたり、被災地に行ったことで、大きく心が動かされ、災害の恐ろしさを知るとともに、どうすることで、子どもたちや大切な人たちの命を守ることができるのか、真剣に考えることができた。この講義は、先生を目指す者すべてが受けるべき内容であると感じました。

○この授業を受ける前まで、私は「防災」を他人事として考え、避難訓練に対しても考えが甘かったと思います。佐藤敏郎先生の話を聞いてから、自分の中で地震や津波から命を守ること、避難訓練とは本番のための訓練であることだというように考え方が変わりました。

○この授業では、講義を聴くだけで無く、震災遺構に実際に行ったことでより災害の実態を知ることが出来た。東日本大震災の時に学校現場で震災を経験した先生方から話を聞いて、それまでの備えでは足りない部分がたくさんあったことが分かった。

○この授業を受講したことにより、教師目線での防災を深く考えるきっかけになりました。実際に被災した学校や震災遺構を見学して思ったことは、災害の悲惨さだけでなく、当時救えなかった命を今後の震災で減らしていくためにどう行動していくべきか、対策の具体化が必要だと気づかされました。

○私は、防災教育論を受講して、防災への意識が大きく変わりました。これまでの一つ一つの活動を振り返ると、沢山心が動かされ、悲しくなったり、悔しくなったり、つらくなったり、その中でも小さな喜びがあったり、様々な感情を味わいました。

○将来、どこの地域の小学校で働くことになったとしても、その場に合わせた防災を子どもたちと一緒に考え、「命を守る行動」を判断して、行動できる子どもたちを育てたいと思いました。

(5) 今後の授業改善に向けて

最終回に、「さらに学びたいこと」や「来年度への改善点」を聞いたところ以下のような結果になった。

表1　さらに学びたいこと・改善点（人）

1	小学校での防災授業の参観（8）
2	地震・津波以外の災害時の対応（6）
3	用意すべき防災備蓄品やグッズ（6）
4	避難訓練の改善・工夫（3）
5	ボランティアや震災復興の取組（2）以下略

その中で、最も多かったのは、「小学校での防災授業の参観」であった。今年度のプログラムでは、学校震災遺構の視察や語り部による講話、避難訓練、心のケア等を組み入れたものの、防災授業の参観はなかった。学生は、小学校の現場でどのように防災授業を実践しているのか実際に観てみたいと考えていた。来年度は、後述するような小学校での防災授業の実践を取り入れられるようにしていきたい。

次に多かったのは「様々な災害時の対応」であった。今回は、東日本大震災の地震や津波に関する内容に偏ってしまった。しかし、近年地球温暖化の影響もあり、豪雨災害が頻発し、激甚化している。今後発生が想定される地震・津波以外の災害についても、ぜひ取り上げるよう工夫したい。

マンネリ化し、改善すべきである避難訓練の在り方については、子どもたちが本気で取り組める避難訓練はどうあったらよいのかを、アクティブラーニングの視点で考えさせるように工夫する。

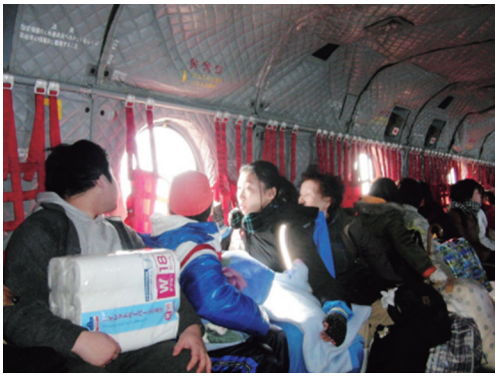
さらに、震災時に発生することが予想されるSNS等を使った偽情報やフェイクニュースの拡散についても、関東大震災の事例をもとに、震災時の正しい情報の取得について取り入れたい。正常性バイアス等心理的な要因についても取り扱っていきたい。

4　小学校での地域連携型防災教育の展開

(1)「自助の力」を身に付けさせる防災学習

論者は、14年前の2011年3月11日金曜日、午後2時46分に、女川町の離島、出島（いずしま）にある女川第四小学校の校長として東日本大震災を経験した。島には、地震から34分後に高さ約20ｍの大津波が襲来し、養殖施設や漁港に係留していた船はあっという間に流され、付近の家々も壊滅し、港は津波で流された家やがれきで埋まっていた。幸い、学校は標高80ｍの高台に建っており、子どもたちも職員も無事だった。津波で島では13名が亡くなり、11名が行方不明となった。その後、衛星携帯電話がつながり、自衛隊のヘリコプターで全員救助された。

2024年12月に、島民の悲願だった出島大橋が架けられた。



自衛隊ヘリコプターで避難する様子（2011年3月12日）

これまで様々な学校等で震災体験を伝えてきたが、震災を知らない子どもたちに、それだけでは「自助の力」を身に付けることはできないのではないかと考えるようになった。

東日本大震災から14年が経過し、小学生全員が震災の後に生まれた子どもたちとなっている。震災で被害を受けた地域で生活していても、14年前にそこで津波で大きな被害を受け、多くの方々が亡くなったことを知らない。特に震災後に住んだ方は、海からの距離やハザードマップ等でどこまで被害が出る可能性があることを分からない場合もある。

長崎県壱岐市立鯨臥小学校での防災授業（2022年11月）

子どもたちが、実際に災害が起こった時に、自分の命を守るためにどう判断し、行動するのかを、現在生活している状況に近い場面で具体的に考えさせ、シミュレートさせることにより、「自助の力」が身に付くのではないかと考えた。

そこで、沿岸部の学区に津波の被災地を有する仙台市立六郷小学校の当時の有馬校長に防災授業の実践について相談したところ、5年生3クラスで防災授業を実施することになり、現在の石橋校長先生にもご理解いただき、これまで4年間授業を行わせていただいている。

(2) 教材開発1　ジオラマとドローン映像で地域の特徴の見える化を図る

手作りの仙台市立六郷小学校区のジオラマ

授業を実施する上で、仙台市立六郷小学校の先生方と打合せを行い、子どもたちにどのようなことを伝えたいのかを確認した。担任の先生からは、「自分たちが住んでいる六郷地区の震災の被害を

子どもたちは知らないので、しっかりと伝えて欲しい」、「映像などを使って、六郷小学校の地域や災害の見える化して欲しい」という要望が出された。

そこで、ハザードマップなどの地図だけではイメージが湧かないことから、六郷小学校区の地理的な特徴を子どもたちに掴ませるために、ジオラマを作成することにした。そして、ジオラマに、自分たちが住んでいる家をプロットさせれば、海に近いという地理的な状況と津波が押し寄せた範囲を知るなど、実感を持って学習することができるのではないかと考えた。

ドローンで撮影した避難タワーの映像教材

さらに、東北学院大学情報学部データサイエンス学科の高橋秀幸准教授に協力をいただき、ドローンを使って海や津波避難タワー、六郷小学校周辺などの上空からの撮影した。

授業の導入で、ジオラマとドローン映像を提示することは、子どもたちの興味を喚起するものと考えた。高橋氏には、その後小型ドローンを用いた飛行の実演、2023年7月に実施した六郷小学校開校150周年記念事業「バルーンリリース」のドローンの撮影映像、業務用小型ドローンのカメラ・スピーカーを用いた防災の活用例などを紹介していただいた。

(3) 教材開発2　地域の語り部の発掘

六郷地区の東日本大震災の被害や地域の様子について授業で話をしてくれる地域の語り部の方を探した。農協関係の方や知り合いなどにお願いしたが、学校での講話となると皆さんに断られ、なかなか見つからなかった。震災でお父様を亡くされた六郷の海楽寺住職である大友雄一郎氏に依頼したところ快く引き受けてくださった。大友氏は教員でもあり、僧侶として全国で語り部として震災の教訓や伝承に取り組んでいる。子どもたちに東六郷地区での震災の被害のようすや六郷地区の子どもたちへの思いを伝えていただくことにした。できれば、授業で直接子どもたちに話をしてもらおうと考えたが、残念ながら、仕事で平日都合がつかなかったので、ビデオ撮影し、当日はテレビ出演をしていただくことになった。

大友氏による六郷地区の震災被害の説明

(4) 教材開発3　震災を自分事として捉える学習課題の工夫

まず、仙台市教育センターで作成に携わった『仙台版防災副読本～3.11から未来へ～　小学5，6年』[8]で防災授業で使用できる内容について検討した。六郷地区の写真や映像等については、仙台市の東日本大震災アーカイブや仙台市のホームページで公開されている津波ハザードマップ[9]を使用することとした。

どうすれば、震災を知らない子どもたちに自分事として捉えさせるための中心発問（授業課題）については悩んでいた。さまざまな発問を考え、子どもたちの生活とも関連させられないか、どうすれば効果的なのかは検討する必要があった[10]。打合せで先生方から「学区内にある海岸公園冒険広場（ぼうひろ）では、震災時に10 mの津波から助かった」、「高学年の子どもたちは、学区内な

ので、自転車で遊びに行っている」という話を聞き、これが自分事として捉えさせる中心発問に使えるのではないかと考えた。

また、2023年からは、学区内の海岸地区に温泉施設である「アクアイグニス仙台」が完成し、そこを訪れる子どもがいたことから、その施設についても授業プリントに取り入れることにした。

(5) 防災授業の実践

仙台市立六郷小学校の5年生の学級で、のべ11回の防災授業を実施した。

2022年2月21日（木）5年1組、2組、3組
2023年2月22日（水）5年1組、2組
　　2月24日（金）5年3組、4組
2024年2月27日（火）5年1組～4組

なお、2025年2月にも同じく5年生を対象に4回実施する予定である。

まず、導入段階で東北学院大学の高橋氏が、六郷小学校150周年記念事業の際に撮影したドローン映像を子どもたちに見せるとともに、小型ドローンを実演した。そして、仙台市の沿岸部では、大津波警報が発令された場合に大型のドローンが飛行し避難を呼びかけることなどを説明した。子どもたちは非常に興味を持って取り組んでいた。

学区の地形を表したジオラマに自分の家の場所をピンで示し、どのような位置に住んでいるのかを気付かせるようにした。学区の地形を俯瞰的に学び、ジオラマ教材を活用し六郷地区の特徴を考えさせ、グループディスカッションを行った。

子どもたちからは、「六郷地区は田んぼが多く、自然に恵まれている」、「温暖で住みよい地域」、「海や川が近い」、「津波が来る」などの意見が出された。

次に、映像と大友氏のインタビュー映像で、六郷小学区での生まれる前に発生した東日本大震災での被害状況を映像や写真で具体的に伝えた。その際、さまざまな状況の児童が考えられるので、事前に担任の先生から聞き、対応するように配慮した。特に、少数ではあるが津波浸水域から登校している児童もおり、事前に保護者に連絡して確認してもらうようにした。

防災授業　学習指導案

2024年2月27日（火）

1　小単元名　1.　自然災害を防ぐ　津波災害への取り組み
　　～ 六郷小学校区に津波が来たら、どう行動するかを考えよう ～

2　ねらい
○津波の発生原因や津波の被害を減らす取り組みについて調べ、日本は津波が起こりやすい場所にあり、国や県、市が対策をしていることを理解する。
○六郷小学校区の津波の様子を知り、自分事として捉えて、もし大津波警報が発令されたら、どのように行動するのかを考える。

3　学習過程

	学習活動	指導上の留意点	備考
導入	1　はじめに ・講師自己紹介を聞く。 2　今日の学習内容を知る。 ○六郷の特色について考える。 ・農業が盛ん。田んぼが多い。 ・お米がおいしい。 ・野菜が豊富。白菜、井戸ねぎ ・温泉がある。アクアイグニス ・海や名取川が近い。 ○ジオラマに自分の家を置く。 ○本時のめあてを理解する。	・開校150周年のドローン映像を見せ、マイクロドローンについて実演しながら説明する。 ・津波避難タワーからのドローン映像を見せ、六郷地区の良いところや地形上の特徴などを発表させる。 ・自分の家が分かりにくい場合には担任の先生に支援していただく。 ・六郷は自然に恵まれ、温暖で住みよい地域だが、海に近いので津波に備える必要があることを伝える。	
	もしも六郷地区に大きな津波が来たら、自分の命を守るためにどう判断し、行動したらいいかを考えよう。		
展開	3　東日本大震災での六郷の津波による被害の様子を知る。 ○津波の映像 ○被害の写真 ○井戸地区　大友さんの話 ○津波の様子を見て、感想や分かったことを発表する。 ・津波が近くまで来た。 ・津波で新しい所に引っ越した。 ・東六郷小学校があったが、津波の被害を受けた。 ・親戚の人も被害を受けた。 4　実際に海の近くで遊んでいた時に、大津波警報が出たら、どう行動するかを考える。	・自分たちが住んでいる六郷小学区の13年前の生まれる前に起こった東日本大震災での被害状況を映像や写真で具体的に伝える。 ・津波避難タワーについて触れる。 ・怖かったり気分が悪かったりする場合は、見せないよう配慮する。 ・いろいろな状況の児童がいるので、担任の先生から事前に聞いて、対応するようにする。（津波浸水域から登校してくる児童も各クラスいるので、事前に保護者に連絡して確認してもらう。→確認済み）	
	あなたは、友達と一緒に（冒険広場）（アクアイグニス）に来て遊んでいました。大きな地震が発生し、数分後に大津波警報が発令され、サイレンが鳴り出しました。あなたは、（冒険広場）（アクアイグニス）にとどまる？		
まとめ	○Yes「とどまる」か　No「避難する」かを自分で決める。 ○その理由も考えプリントに記入する。 ○グループで話し合う。（時間に応じて） ○全体で発表する。 5　本時のまとめをする。 ○津波ハザードマップの目的について知る。 ○大友さんの後半のお話を聞き、地域を大切にすることについて考える。 6　感想を記入する。	・まず、1人で考えさせるようにする ・なぜ、そう決めたのか理由を考えさせるようにする。 ・時間があれば、グループで話し合わせる。 ・答えは決まっていないこと、自分なりに状況を判断して、最善の方策を考えることを話す。 ・13年前に六郷地区に約10ｍの津波が来た。もっと大きな地震が来たら、六郷に津波がくるかもしれないこと、ハザードマップを信じないで、自分の命は自分で守り抜いていってほしいこと、そのためには、津波から防ぐ施設を頭に入れておくことが大切であることを伝える。 ・「自分の命は自分で守る」	

自分たちが住んでいる六郷地区を襲った津波を初めて見たという子どもたちが多かった。

その後、この授業の中心活動となる発問を子ど

小型ドローンの飛行実演の様子

六郷小学校150周年記念のドローン映像

ジオラマ教材を活用したグループディスカッション

もたちに問いかけた。

「海岸の冒険広場で遊んでいた時に、大きな地震が発生し、大津波警報が発令された。サイレンやドローンが警報を知らせている状況で、どのように行動・避難しますか」

この冒険広場（ぼうひろ）には、六郷小の学区にあり、様々な遊具があるので、高学年は子どもたち同士で自転車に乗って遊びに行っているという。自分の判断やその理由を考えさせ、その後グループでそれぞれの意見を話し合った。

(5) 授業を振り返って

震災時に、自分たちが住む六郷学区にも大津波が押し寄せ、被害があったことを聞いたことがあるが、具体的には知らない子どもがほとんどであった。地域の大友氏の話を聞いたり、震災時の映像や写真を見たりすることで、被害や多くの亡くなった人がおり、六郷小学区に多くの津波避難タワーがあることを知り、驚く様子も見られた。

また、防災授業へのドローンの活用については、子どもたちの興味・関心を高める上で大変効果が見られた。震災時のドローンを使った避難誘導活動を実際に模擬体験し、臨場感ある活動ができた。今後は、ドローンの活用を進めるのであれば、教室ではなく、体育館や校庭等の広い場所で飛ばして、実演することも検討していきたい。

中心発問については、「冒険広場にとどまる」という意見が多かった学級、「内陸に全力で避難する」、「津波避難タワーにのぼる」という意見が多数を占めた学級など、学級ごとに反応はさまざまであった。子どもたちは、自分の判断した根拠をしっかりと示し、意見を述べており、津波発災時の避難行動を「自分事」として捉えて、どのように避難すべきかを一人一人が真剣に考える姿が見られた。

課題としては、各学級1時間の特別授業であったので、ドローンの模擬体験、津波映像の視聴、ジオラマを使った活動、冒険広場からの避難について考え発表する学習等、学習活動の内容を盛りだくさんだったことが挙げられる。学習活動や提示する教材を精選し、子どもたちが意見を考え、発表する時間を確保できるよう改善を図っていきたい。

また、子どもたちにとって、外部の人が1時間だけ来て防災授業をする形になると、導入段階やグループ活動が難しい点も見られる。担任の先生

が防災授業を行う際に、大学関係者や地域の方々がサポートする形も探っていきたい。

さらに、先生方と必ず事前に打合せを行いながら、授業に臨んだが、教員の多忙化が問題になっている中、先生方負担を少しでも減らし、先生方の思いを授業に反映できるよう努めていきたい。

今後は、ドローンに加え、VRなどの新しい技術も活用し、地域の想定される災害に応じて、臨場感を持って学習できるような防災授業に向けて深化させていく。

5.　まとめ

本研究では、教員養成課程において防災教育プログラム「防災教育論」を実践し、東日本大震災の教訓を「自分事」として学ぶために、地域の語り部や震災遺構を積極的に活用を図り、教員を目指す学生の意識の変容等を見てきた。

その結果、これまで「他人事」だった防災が「自分事」となるなど、防災意識に大きな変化が見られた。また、「子どもたちの命の大切さ」を教員の視点で考えるようになり、避難訓練などの防災教育の課題に気付いていった。被災地へ直接赴き、震災遺構を視察したり、語り部の方々から経験を聞いたりする経験ほど、震災の実相に触れ、心に響く経験はないと考える。地域の語り部や学校震災遺構の活用は、教員を目指す学生が「命の大切さ」を学ぶ防災教育において大変有効である。

改めて防災教育は、教員を目指す者が受講すべきであるとともに、単発的、イベント的に終わらせるのではなく、体系的・実践的に防災教育を学ばせる必要性を感じた。

これらは提出した課題や感想を見ただけであるので、将来教員になった時に、子どもたちの命を大切にし、防災教育を指導できるよう成長することを祈っている。

今後も、子どもたちの命を災害等からどうやって守るのかを真剣に考えていく教員を育成できるよう、プログラムを改善していきたい。

次に、震災を知らない小学生に、「自助の力」を身に付けさせる防災授業の開発と実践を行った。東日本大震災から14年が経過すると、震災で被害を受けた学区で生活していても、被害や多くの方々が亡くなったことを知らない状況が見られた。

震災を知らない子どもたちに、被害や地域の状況を伝えることは必要であるが、実践をしてみて、やはり、その学習活動だけでは、次に大きな災害が起きた時に「自分の命は自分で守る力」の育成にはつながらない。命を守るための避難行動を「自分事」として考えさせる学習が必要であることが分かった。

1時間だけの防災学習では、自助の力は身に付かない。子どもたちの発達段階に応じた、継続的な防災教育が必要であるので、釜石小学校等の実践例[11]をもとに、より効果的な防災教育の在り方について、さらに研究を深めていきたい。

謝辞

本研究では、震災遺構研修や被災地における防災教育を実施するにあたり、荒浜小学校元校長　川村孝男氏、釜石小学校元校長　加藤孔子氏、大川伝承の会　佐藤敏郎氏に、教師を目指す学生に丁寧にご指導いただいた。

仙台市立六郷小学校での防災授業の実施にあたっては、校長　石橋雅之氏、前校長　有馬玄康氏をはじめ、六郷小学校の先生方にはご理解、ご協力をいただいた。

東北学院大学　高橋秀幸氏には、ドローンの活用や防災について分かりやすく指導していただくとともに、多くの示唆やご協力をいただいた。海楽寺住職　大友雄一郎氏には、震災時の被害の状況や子どもたちへの思いを伝えていただいた。心より感謝申し上げます。

付記

本研究はJSPS科研費（課題番20K22217）の助成を受けて行われたものである。

引用・参考文献

1）片田敏孝『命を守る教育―3.11釜石からの教訓―』2012年3月，ポプラ社.

2）水野欽司「防災教育の名作『稲むらの火』由来記」

1986 年，統計数理研究所，P1.
3）佐藤敏郎『16 歳の語り部』2016 年 2 月，ポプラ社.
4）中央教育審議会「第 3 次学校安全の推進に関する計画の策定について（答申）」2022 年 2 月 7 日
5）今野孝一「教員養成における東日本大震災の教訓を基にした防災教育カリキュラム」，2024 年 3 月，宮城学院女子大学　発達科学研究所紀要 No.24, P31-42.
6）藤岡達也「これからの教員養成・教員研修における体系的な学校防災の構築　～教職大学院での授業・実習を例に～」（『近年の自然災害と学校防災 I 』兵庫教育大学連合大学院・防災教育研究プロジェクトチーム，共同出版，2020 年 3 月）
7）文部科学省『学校の危機管理マニュアル等の評価見直しガイドライン』，2022 年 2 月，ジアース教育新社，P237.
8）仙台市教育委員会『令和 2 年度仙台版防災副読本～ 3.11 から未来へ～』，2020 年 3 月.
9）仙台市「津波ハザードマップ」，2023 年 5 月（https://www.city.sendai.jp/hinan/kurashi/anzen/saigaitaisaku/jishintsunami/documents/tebiki6-5.pdf, 2024 年 2 月取得）.
10）小田隆史『教師のための防災学習帳』，2021 年 3 月，朝倉書店，P88-89.
11）加藤孔子『このたねとばそ　―大津波を生き抜いた子どもたちのひみつが未来の命を救う―』2022 年 7 月，岩手大学.